「我が人生思い残すことなし」(後編)

作：北郷遥斗（きたごう はると）

読者の皆様、長らくお待たせ致しました。いよいよ今号から「続編」のスタートです。ぜひご期待下さい。

※ 前回までのあらすじ ═══ 神戸大空襲の後、きみと昭男の妹達は実家を頼って広島へと疎開したが入隊志願の昭男は、父治一と神戸に残ったがしばらくして反戦派の父は特高から逃れる様に失踪した。やがて戦争は激しくなり。沖縄占領、原爆投下、そして敗戦を迎える。═══

（尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp）

１．廃墟

失意と廃墟の中で１億国民は茫然自失の中に居た。全てが信じがたい事だった。決して受け入れる事が出来ない現実が眼前にあった。子を失い、親を失い、家も街も何もかも失った。それもこれも「勝利のため」と自らを慰めていた。その唯一の支えも失い、悪夢と孤独と絶望の深い深い谷底でおびただしい人が悶え苦しみ続けた。間もなく米英占領軍が進駐し、ますます人々の不安を掻き立て、多くの戦争犯罪者らが捕えられると、「いずれ皆殺しにされる」ものと覚悟さえした。

昭男は「玉音放送」の後、魂が抜かれた様に「神戸」をさまよい、残飯やカエルを見つけてはかろうじて命を繋いでいた。先日母のきみから手紙が来て、まだ原爆や戦後の混乱で広島を出られないけどそっちは大丈夫か？父ちゃんは帰ってきたか？と書いてあった。父はあれっきり音沙汰はない。昭男は返事をださなかった。いや出せなかったのである。紙もペンもないし、だいたい何を書いていいのか分からない。「全てがイヤになった。もう生きていてもしかたない」と正直に言う訳にも行かず、金を送るから動けそうならこっちに来いとの問い掛けにも「何を今さら・・・」と答える気にもならなかった。「ちくしょう！何でこんなふうになってしもたんや！！」声にすると無念さと悔しさで胸が張り裂けそうになった」「これからほんまにそうしたらええんや」「もう死んでしもた方がええわ」そんな声ばかり毎日ずっと頭をよぎっていた。

「ただ今、新千歳空港発ＡＮＡ654便が定刻通り到着致しました。お出迎えの方は第2到着口付近でお待ち下さい。」関西国際空港の到着ロビーで午後2時45分に昭男はアナウンスを聞いた。平成7年8月3日。「あれ」から50年、半世紀の時が流れ、今昭男は妻美子（よしこ）と北海道から夏休みで5年ぶりに訪ねて来る孫の雄大（たけひろ）とはるかを出迎えるため、2時間も前からこの空港で今か、まだかと待ちわびていた。雄大は中学3年生の15歳。今年受験だ。妹のはるかはすこしおませな小学5年生の11歳。昭男は今の年65歳を迎えていた。

（つづく）